
鎖固めのパラノイア

ゆきやおる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鎖固めのパラノイア

【Nコード】

N3122BA

【作者名】

ゆきやとおる

【あらすじ】

人間を食らう無物、と呼ばれる怪が見える刑事、朱雀は事件現場で無物と遭遇し命の危機に遭う。そんな朱雀を助けた少年尊は無物を倒すために存在している宝珠を得るため街を転々としていた。偶然か必然か、朱雀と尊が出会う事によって物語の歯車が回りだす…。

プロローグ

「なんだよこれ…」

負傷した部下を抱えてただ一言口から紡ぎ出た言葉は、室内に僅か反響して消える。

静かな二人の息遣いの他に、ぼんやりとした声が響いている。それは声、と呼ぶには脆弱な音で、意味を成さない。低く、背筋に伝わるとようなその声の主は二人を見下ろしていた。

部屋は生臭い。血の臭いが充滿している。

男は震える右手で銃を構え、今自分たちを見下ろし、奇妙な声を上げている存在をこう呼んだ。

「化け物じゃねえか…」

鎖固めのパラノイア

KEEP OUT、と書かれた黄色いテープに張り巡らされた一室。

刑事の朱雀^{すずく}優雅^{ゆうが}は目の前の現状をまだ、理解出来ずにいた。

鑑識達が囲んでいたはずの一室が突然自分と隣の部下、笠家^{かさか}を残して化け物と対峙させられている状況だ。悲惨な現場は、その化け物の存在で一気に食事場と化しており、さながら自分は新しいデザイナーだろうと薄ら冷静な頭で朱雀は思った。

銃を鳴らすも、まるでおもちゃのように空間に歪められ、弾丸が真っ直ぐ飛んで行かず。化け物は先ほど倒れていた死体を平らげるとぴたりとこちらを向いたようだった。

ただし確証はない。目が無いのだ。体は2メートル程あり、マンシヨンの一室には狭すぎるほどの巨軀をしている。そして全体的に黒い霧のようで、手と思しきものが、先ほどの啄ばんでいた死体の一部を持っている。

そして顔らしき真ん中辺りにはその存在丸々を占める大きな口が、朱雀達を待ち構えているように少し上下に動いていた。

朱雀は最初この空間になった瞬間襲われ右肩を深く抉られてしまった笠家の止血を行い、彼を守るようにして化け物に向き合っている。どれぐらい時間が立ったのだろうか。

朱雀はこうした非現実的なものを信じないで生きてきたが、流石にこれは夢とは思えないほどリアルティがある。頬を抓っても普通の現場に戻りそうに無い。

現状を理解できないまま、死を感じた瞬間、化け物は素早い動きで両手を振り上げ、朱雀をなぎ払った。

咄嗟にこぼれ落ちた笠家を抱きとめようとしたが叶わず、笠家は腕をぶらりと人形のように持ち上げられて化け物は大きく口を開いている。

無駄だと分かっているながら、銃を構え、朱雀が叫んだ。

「笠家！」

轟音が鳴り響き、一度目を閉じた朱雀は何が起こったかわからず、辺りを見渡す。

耳障りな高い声が鳴り響き、べちゃりと床に落ちた残骸が、化け物のものだと気づいた時には、視界に先ほどまでこの空間にいなかっ

た少年を見つけ、朱雀は目を開いた。
少年は漸く聞き取れるような声で一言、

「もう大丈夫です」

そう告げ、朱雀の足元にそつと笠家を寝かせた。

朱雀は直感した。自分たちは助かるのかと…。

「いやあ…ありがとうございました」

人がよさそうな笑みを浮かべた男が、少年に深く頭を下げる。

少年は無口で、別段謙遜するわけでも不遜になるわけでもなく手を振り、首を振る。

朱雀はそんな少年に感謝するでもなく胡散臭そうな視線を遣ると煙草に火を灯した。頭を下げていた男、横川よこがわはそんな朱雀の耳を引く張ると少年の前に朱雀を連行する。先ほどの優しげな表情を一変させ、強面な顔つきで横川は朱雀を睨んだ。

「てめえも命助けて頂いたんだから礼の一つくらいしろ！」

「でも…警部…こいつガキですよ？」

「命の恩人に子供も大人も関係あるか、さつさと頭ぐらい下げろ、つたくしょうがないヤツですみません…、八鬼さん」

少年 八鬼尊やぐらひは無表情な口元にうつすらと笑みをつくり、再び首を

ふった。

朱雀は横川の腕を面倒そうに払いながら、深くため息をついた。

あの時、朱雀は確かにこの少年が不思議な術を使い、化け物を倒した所を見た。現場に居た他の人間も、突然笠家と朱雀の二人が消えたと証言しているし、実際アレがなんだったのか今でもわからない。尊は突然この現場にやってくると、その二人を連れ戻すと言ってあの空間に自らの意思でやってきたのだという。混乱した頭がまだ、整理の余地を求めていた。

ふと尊の方から朱雀を見つめる視線を感じ、朱雀は下げていた頭を上げて尊を見上げた。

まだあどけなさが残る中性的な整った顔の少年で、やはり無表情だった。少年は聞き取りにくい声で胸元から一枚の紙を朱雀に向け、告げた。

「被い料金、二人合わせて二十万円です、口座振込みにしますか？
キヤッシュにしますか？」

勿論朱雀が怒鳴り声を上げてこれに抗議するのは、言うまでもない。

第一章 八鬼尊という少年

仕事が終わりに、念のため病院へと向かった朱雀は、その背後にぴつたりと尚も続く尊にうんざりとして振り返った。

仕事の合間は署の中でかわいがられていたようだったが、いつの間にか自分の子供のように背中尾を追いかけてくる尊に、朱雀はついに苛立った声を上げた。

「あのな、いい加減にしるよ、公務執行妨害で逮捕するぞガキ」

「今は非番じゃないんですか？」

「声が小さくて聞こえねえよ、つたく、お前家は？」

「それが…今までお世話してくれていたお姉さんがちょっと…いなくなっちゃって…」

「はぁ？無責任な保護者だな…」

朱雀は煙草をくわえ、薄目を開いて尊を見つめる。置いてきぼりにされたにしては別段困っているような様子もないし、この図太い性格、慣れているのだろう。それはそれで不憫には思えるものの、自分とは縁のないこと。あれは全て夢ですらあったと感じている朱雀は、猫のように尊の服を掴むとしげしげと眺める。

「しっかし奇妙な格好だな…アレか、コスプレってやつか？」

「違います、これは仕事着です…」

狩衣と呼ばれる公家が着用していたとされる着物を身に纏い、長い袖は指先すら出ないほど。身長も低く、幼い彼には着せられているという感じがして落ち着かない。そんな格好をした少年がぴつたりと知り合い程の距離でついてくるのだ、目立って仕方がなかった。

朱雀は呆れた表情で尊を見つめていたがやがて地面に戻し、その長い袖から無理やり手を引っ張り出すと、尊の手を引き歩き出した。

「とりあえず、近くの交番に連れてってやるから、そこでこれからの事を相談しろ。今は便利だからな、子供を預かってくれる施設なんて沢山ある」

「や、やめてください…私、家も一応あるんです、お願いですからやめてください…」

「大きい声も出せるんじゃないか…」

はあ、とわざとらしくため息をつくものの、見上げてくる尊の視線はまるで雨に濡れた子犬のようで。

結局交番に突き出すことも出来なくなってしまうた朱雀は、尊の視線に合わせてしゃがみ込むと、念を押すように告げた。

「言つとくが、俺は笠家の分も含めて二十万なんて払う気さらさらねえからな。ただ…お前に世話になったことを認めて、ラーメンおごってやる、それでチャラな」

「ラーメン!？」

ラーメン、と聞いた途端目を輝かせた尊に、漸く子供らしさを見出した朱雀は再びため息をつき、尊の頭を撫でる。

(素直な方がかわいいもんを…)

先ほどから、嬉しそうな顔や困った顔、などはするものの目にあまり活気がないためか、どうも無表情さが拭えない尊の表情。全てを悟り、この世に絶望しているかのような渴いたその表情に、朱雀は眉根を寄せた。

病院に到着した朱雀は、尊を待合室に待たせて検査をしに病棟へと入っていった。

尊は手を振り、そんな朱雀を見送ったが、やがて数秒も経たない打ちに待合室を抜け出すと、ナースステーションのカウンターに背伸びをし、手近な看護婦に尋ねた。

「あいつ、笠家修二さんってどこのお部屋ですか？」

「ああ、今日搬送された方ね。今は手術中だと思っわ…暫くは集中治療室からも出れないかもしれないわね…ボク、笠家さんの家族かな？」

「はい…あの、笠家さんがもし…もし病棟移ったらこれを渡して欲しいんですがいいですか？」

看護婦は首を傾げつつ、渡された白い封筒に視線を落とし、尊へ笑顔を向けた。

「お手紙ね、わかったわ必ず渡しておくね」

「はい、必ず、忘れないで下さいね」

必ず、という言葉を強調し、尊は待合室にそのまま走り去っていった。

看護婦は手紙と、尊の背中を交互に見遣り、封筒を表裏にくるくるとひっくり返しながら再び首を傾げた。

「でも…なんだか変な子ね…何が書かれているのかしら…」

無事検査を終えて、待合室に戻ってきた朱雀は、やはり目立つ少年の存在に顔が引きつるのを覚えた。子供たちが絵本やおもちゃで遊んでいる待合室のプレイルームの端っこで、六法全書を片手に売店のパンを貪る狩衣の少年。周りの母親も不気味がつか子供たちを出来るだけ遠くで遊ばせているし、ここで彼の知り合いだとバレると視線が痛い。いつそのままだまプレイルームに置いておこうかと踵を返した途端、声が掛かった。

「ゆうくん!」

まさかとは思うが自分の事ではあるまいな?と一瞬振り返れば、あつという間に尊と視線が合い、早足でそのまま立ち去ってみようとしたが、尊はすぐさまそんな朱雀の後をつけて自身も走り出した。

「ゆうくん、待ってください、私はあなたを待っていたんですよ!」
「俺は待合室で静かに座つてると言ったはずだ…なんでガキにまみれて小難しい本読みながらガキの遊び場占拠してんだよ、おい、それにその呼び名やめろ!」

「いいじゃないですか、これから私と過ごすんですから、私のことも好きに呼んでくれて構いませんよ」

相変わらず声は小さかったが、透き通っている声を持っている為か、耳には触れる。

そして案の定病院に来ている人の視線は氷結のように冷たく、朱雀は一刻も早く彼にラーメンを食べさせて家に帰りたい気持ちでいっぱいだった。

尤も当の本人である尊はそ知らぬ顔をしているのだが…。

「じゃあガキ」

「それは却下です」

「じゃあ変なガキ」

「それも却下です」

「じゃあすげえ変なガキ」

「それも却下します」

そんな不毛な会話を延々と続けているといつの間にもやら病院から出て、二人は街に包まれた。

ネオン輝き、都市という言葉そのまま表したような密着するビル群へと、歩みは進む。

きよるきよると視線をさ迷わせていた尊はふと足を止めて、朱雀の手を引いた。

「ゆうくん、ここにしましょう！」

ラーメン屋、というには申し訳なさそうなほど狭く小汚い店舗を指した尊に、朱雀は本日何度目かわからないうんざり感を抱きつつも、これで尊とおさらば出来ると思い、了承する。

鼻を僅かにくすぐるだし汁の匂いに誘われるように、二人はその店舗、“すみれ屋”に入っていくのだった。

一話

すみれ屋のラーメンはごくシンプルなものが多かった。メニューも少なく、油でくすんだメニュー表は既に使っている者は殆どいないだろう。そんな常連客用のラーメン店に初めて足を運んだ朱雀は暫くその文字が見えなくなってきたているメニュー表を見つめていたが、隣にいた尊がすつとカウンターから体を乗り出し店主に注文をする。

「しょうゆラーメン二つ、ギョーザ一皿、あと私にはめんま多めで」

「はいしょうゆ二つ、ギョーザ一皿、めんま多めね」

「おいっ、勝手に頼むなよ、俺はトンコツ派なんだ！」

「初めて入るラーメン店の味を知るにはオーソドックスなしょうゆが一番いいんです、あとギョーザも欠かせませんあとメンマ」

「…お前：ここ入ってから声のトーンが上がったな…」

よほどラーメンが好きなのか、狩衣から小さな手帳を取り出すとすみれ屋のことに關して事細かに記載してゆく。まるで通のようだが、見た目がこれだ、少し笑いがこみ上げてきたが笑ってしまうと泣かせてしまうかと思ひ、咳払いをする。

するとそれを見通していたのか、尊は手帳から視線を外さず朱雀に告げる。

「…どう思つのも勝手ですが、私をあまり子ども扱いしないで下さい」

パタン、と手帳を一度閉じ、狩衣の袖に再びしまつと尊は朱雀を真剣な眼差しで見つめた。

「あなたから…私に聞きたいことはないんですか？」

それは言わずもがな、今日あった出来事の事を指しているのだろう。水に入った氷をゴロゴロと回転させながら、自分の聞きたい事を整理し、まず、と一度口を開いて閉じ、朱雀は尊を見つめた。

「お前は何なんだ」

尊自身、そんな事から問い詰められると思っていなかったのか、光のない目に驚きの感情を少し表していたが、やがて口元に笑みを作って答える。

「私は私です、実は今日、依頼されていたのは今日私が倒したヤツではなかったんです」

「…どういうことだ？」

「まず、順を追って話しましょう。あなたが出会ったあの馬鹿でかい怪物は、無物むぶつ、と呼ばれていて人に害をなすものです。それはあなたが目にした通りだと思います」

朱雀は不服げな表情をしながらも、頷く。それは否定のできない事であった。それでもなければ笠家は一体何があってあんな大怪我をしなくてはならなかったのか、自分が被害に遭ってないからまだピンとこないものはあるが、あこで起きたことは認めたくはないが事実。

朱雀が頷くと、尊はメモに使っていたペンの先で、カウンターをトントンと叩く。

「アレを目にする事ができるのは二つの種類の人間しかいません。一度無物に遭い、命が助かっている者、それと私のように生まれた時から目にする事が出来る者、です」

「やっぱり他の人には見えないのか…」

「はい、見えません。ですが、なんらかの理由があり、無物に出会ってしまつて助かつて、彼らはマーキングと違って一度仕留めそこねた餌に印を残すんです。そうして、自分が狩りをしている時にそのマーキングした餌が入ってくると、自動的に餌場に引き込む能力を持っています」

「餌場に…引き込む…？」

朱雀は背中に嫌な汗を感じて、水を口に含む。それはまるで、今日自分があの不思議な空間に巻き込まれた時と同じじゃないか。そう脳内で思つた瞬間、尊が続けた。

「そうです、今日のゆうくん、そして笠家さんと同じ状況です」

「ま…待てよ、俺はあんなの初めて見たぞ、どういう事だよ！」

「そうだとしたらその記憶が間違っています、無物のテリトリーに侵入できるのは、無物にマーキングされている者だけです」

「…じゃあ、お前も…？」

こくり、と尊が頷き、現実感のないこの話に頭が痛む。

朱雀が頭を抱え込むと、ラーメンが二つ、カウンターに並べられ、尊は朱雀と自分に一揃えつつ用意し、パチン！ときれいに二等分してめんまをぐちゃぐちゃと麺にかき混ぜ始めた。

朱雀はラーメンを一瞥したため息を吐くと、さつそくすすり出した尊の顔を更に見上げた。

「私は生まれた時からマーキングされていたようなものですし…それはそうと、あなた達はこれから危険です。無物はどこにでも出現します。対処するには私のような被い屋を雇っておかなければ、再びテリトリーに引きずり込まれてしまいます」

「被い屋？お前つてヤツはどこまで胡散臭い商売をして…」

「では尋ねますが」

分厚いめんまにふうふうと息を吹きかけていた尊はそれをスープに戻し、箸を置くとひたと朱雀を見つめた。突然冷たい声音で切り返してきた尊に気圧されながらも、朱雀は顔を上げて尊に向き合う。

「あなたが妄想というのなら、この世界に住み、無物に殺された人たちはあなたの夢なのですね？」

朱雀は返す言葉がなかった。

それは確かに、自分の目でも見た事。現場に倒れていた死体はあの後、忽然と姿を消してしまっていたのだから、彼がいう無物とやらに殺されて、腹に入れられてしまったのだろう。

朱雀はそれもわかっていて、認めるのが嫌でたまらなかったのだ。

こんな非現実的なことが、現実に転がっている訳が無いと、否定しなかったのだ。

それでもこうやって命を助けてくれた少年と、病院で確かに治療を受けていた笠家を思えば認めざるを得ない。

朱雀は力なく箸を割り、伸びてきてしまったラーメンに口をつけた。

「私を依頼してきたのは、横川警部です」

「何だと？じゃあ横川警部も、その、化け物に？マーキングされてんのか？」

「そのようです」

「じゃあ俺にかまっている場合かよ、横川警部は大丈夫なのか？」

「…通常、無物は一つの固体から、分散されたものが人を襲い食らっているものが多いのですが、その無物は元固体である為、一度その分身を倒しても記憶の共有をしています。マーキングされたのであるならば固体そのものに記憶が残っています、即ちまた襲われてしまいます」

これは、と尊は再び袖に手をつ突っ込むと白い封筒を取り出し、朱雀に手渡す。それはナースステーションで尊が渡したのと同じ封筒だった。

「その無物から暫く姿を隠す事が出来る札ふたです、横川警部にも渡してあります、安心して下さい。ただ…ゆうくんには効かないかもしれません」

「はあ！？なんで俺だけ…！」

食って掛かろうとカウンターに手をついた瞬間、その音より豪快にくうつ、と尊の腹が鳴り、尊は照れたように頬を赤らめながら朱雀に尋ねた。

「…替え玉…いいです？」

三話

ずるつ、とラーメンをすすする音を聞きながら、朱雀は時計と自分の財布を眺めた。

替え玉を要求してからというもの、朱雀が話しかけても上の空といった様子でただラーメンを貪り、ラーメン屋に来てから二時間、替え玉の回数にして15回。漸く腹がおさまったのか、箸を置いた尊は無表情で端整な顔に笑顔を作り、ご馳走様でした、と告げた。

朱雀は既に言葉を掛けることも諦め、口から溢れてくるのはため息ばかり。

財布から万札を出して店を出ると、再び猫のように尊の着物を引っつかみ、顔にしわというしわを寄せると悪態をついた。

「ったく、ラーメン奢れば付きまとわなないで済むかと思えばとんだ無遠慮なガキだな、テメエ」

「いやあ、あれぐらい奢っていただけのなら被い料ももう少し減額してもいいかなって思えてきました、本当にすみません」

「当たり前だ、払う気もねえよ」

ポケットから我慢していた煙草を取り出し、乱暴に唇で挟み込むと素早い手つきで火を灯して煙を吐いた。先ほどのラーメンよりずっと美味しく感じられる煙草の味。

その薄く白い煙の向こうに立っていた尊は、急に火が灯った瞬間、真面目な顔つきで朱雀を見つめた。

「朱雀さん、早くここから出た方が良さそうです」

「あ？」

「ここはごつやら、無物のテリトリーだったようです」

小さな尊の声を完全に聞き取る頃には既に遅く、周囲をぐるりとあの歪んだような感覚が包み込み、朱雀は思わずくわえていた煙草を口からこぼれ落とした。

尊はすつと両の手で大きく輪を描くと、その中心に朱雀を囲んで障壁のようなものを作り上げた。

それはうつすらと緑色をしてまるで眼鏡のレンズのように目で確認できるもので、朱雀はただ圧倒されてその様を見つめる。

最初に助けってもらった時は情けない事に気絶してしまった為、どのように自分が助かったのか見ていなかったが、すっかり漫画の世界のように、歪んだ空間と自分の体を取り囲む障壁に見入る。

尊がその障壁を作り上げた瞬間、ぐん、と尊の体がまるで地下から引っ張られているように傾き、尊は抵抗するように足を蹴り上げた。そして、今回対峙することとなった無物が、仕留めそこねた尊を仕留める為に地面から姿を現した。

朱雀は、その姿に吐き気を感じてしゃがみ込む。

無数の人間の腕がより固まったような肉塊。それはそれぞれに意思があるように蠢き、獲物を探し当てているようでもあった。

尊は静かに朱雀に振り返り、唇に人差し指を当てながら警告する。

「これから絶対に声を出さないで下さい。あの無物は視覚がありません、声を出さず、この結界に居れば安全です」

朱雀は顔をしかめながらも黙って頷き、尊は朱雀が了承したのを確認すると胸元からテニスボール大の赤い球体を取り出し、掲げる。

『我が名をもつて汝の武器を賜らん』

カツと目を開けていられないほどの赤い閃光が迸り、尊が持っている球体は内側から力がかかったように破裂し、砕け散った。

尊は暫く残念そうにその様を見つめていたが、両腕を左右に開き、手を広げると先ほどまでこの空間になかった二刀の剣が現れ、尊は深く体を屈めて剣を構えた。

「宝刀、夜桜……」

声に反応した無物がかしゃかしゃと腕と指先を足のように操り、尊に襲い掛かる。

尊は素早く無物の間合いに駆けて行くと、一撃目の無物からの打撃を軽々避け、夜桜の刀身を無物に忍び込ませる。くるり、と尊が一回転する頃には腕が二本ほど宙を舞い、血飛沫が噴出した。

夜の細い路地に光る夜桜の怪しげな光と、人間のように生々しい無物の血液。

それはネオンの元、原色ギトギトの輝きを反射して、朱雀は一瞬、美しいとさえ錯覚する。

怒り狂った無物が放つ強烈な打撃を難なく避けつつ、尊は一度地面に手をつき、半回転するように大きく飛躍する。前方と後方、左右にしか動く事が出来ない無物は暫くその場に縫い付けられたように動かず、尊は容赦なく二本の剣を無物へと突き立てた。

全身の体重を込められたその強力な攻撃に怯んだ無物が、ばらり、としおれた花のように地面に突っ伏した瞬間、尊は剣を突き立てたまま、剣を体と共に回転させ、無物の体は四散する。辺りは一面、無物の血の海と化し、尊はスッ、と剣をまた何処かへと消してしま

った。

朱雀は声を出すな、と言われる以前に自分が今全く声が出せない事に気がついた。

血で濡れそぼる尊の黒髪は雫を落としながら体も濡らしてゆく。

無物が消えた瞬間、テリトリーも消え去り、ふっと力が抜けたように尊はその場に倒れこんだ。

「あ…おいつ！」

駆けつけ、抱き上げると朱雀は尊の体があればほどラーメンを食べていたとは思えないほどやせ細っている事に気がつき、苦しい表情を取った。

こんな少年が毎度こんな事をしているなんて、そう思うと無物を頑なに認めなかった自分の心を、少し浅ましく感じてしまう程に朱雀は内心、シヨックを受けていた。

血まみれの少年の姿を多数の人間に見られるわけにもいかず、はあとため息を吐き出せば、寒空の下、それは淡く白い姿を現し、すぐに闇へと溶けていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3122ba/>

鎖固めのパラノイア

2012年1月12日03時50分発行